

まちの史跡めぐり……(95)

町文化財専門委員 石瀧 豊美

江戸時代へようこそ (8)

= 村の一年 (続き) =

前回に続いて『村役人心得』を見ていきます。

〔四月〕
用水溝の普請
旧暦の四月ですから、今の季節感では五月。今年の場合、二月九日が旧暦の元旦(旧正月)で、旧暦の四月は今の五月八日から六月六日に当たることになります。

まさに田植えシーズンの直前です。それで、こういう指示が出ています。

「村の田方用水溝や水吐溝などは大小に関わらずていねいに浚(さら)えておくこと。破損等があれば丈夫に修理し、そのほか井手の普請なども、今月半ばには必ず完成させるよう取りはからうべきこと。」

田植えの準備、ことに工事を要するようなことについては、四月半ばには終えておくように、というわけです。

用水溝が田へ水を引く溝であれば、水吐溝は田から排出する溝という意味でしょうね。

面役帳
面役帳は月初めに大庄屋に差し出すよう決められています。十五歳から六十歳までの男性は公役の義務がある。このこと

は第八九回や第九三回で触れています。ため池工事、道路の補修、橋の架け替えなどの土木作業、参勤交代などの荷物運びなどに従事することになります。

村で、この公役の義務を持つ人の名前を登録した帳面が面役帳です。今回の工事はその村からは何人出てくれというような達しが来ると、帳面の前の方から順番に出ていくことになります。

出ていかなかった場合はそのことを帳面に付けておき、後から、欠席の日数に相当する金額を納めることとなります。一年分の帳面で「出」の不足を数えることから、こういう切り立てを出不足と呼んだようです。この習慣は現在も残っています。ただ、今は年齢制限や性別の制限がない場合が多いようです。

運上銀
江戸時代の税負担としては年貢がよく知られていますが、年貢はあくまでも田と畠(宅地は名目の上で畠として扱)にかかります。しかも現物納であったり、田の作物である米で納められた。福岡藩の場合、畠の年貢には米で納めていました(代納

と言います)。

年貢の他には、上納・切立・運上などがありました。

運上は商工・漁獵・林業・鋳業・運送などの営業者にかかるもので、一言で言えば商売人にかかると言ってもいいでしょう。したがって特定の商売に従事する者に関係しますが、農村では山札銀と藪坪銀が農民一般にかかっています。

「諸商売運上銀と山方仕組み払の竹木代銭を共に取立て、判屋に払って預手形を受け取り、十日までに大庄屋に差し出すこと。」

村で商売に従事する者、たとえば鍛冶屋・染物屋・大工・石工・水車屋(水車で粉をひく)……などが、それぞれ商売の種類・繁盛の程度に応じ、運上銀を負担します。

また、山林の木は伐採を禁じられていますが、間伐や植林、風水害などのために特別に木材が払い下げられることがあります。それらの収入は山方仕組(山を管理する山方の運営資金)に回されるようになっていました。

それら運上銀・竹木代銭は直接お金を藩に差し出すのではなく、判屋に代金を納め、その領収書に相当する預手形を受け取って、

その手形を大庄屋に差し出すよう決められていました。

この場合、預手形は今言う収入印紙のような役割を果たしています。判屋は公定のそういう仕組みの一環を担う民間の業者です。その業者が「判」を押すことで、効力を発揮するのが預手形だったのでしょう。藩は後日、判屋に一定の手数料を払って、代金を回収していたこととなります。

旅日屋
他国から出稼ぎに入り込んでいる人たちが旅日屋。月初めに、大庄屋に旅日屋書上帳を差し出すよう決められています。

東照宮祭礼
十七日は東照宮の祭礼でした(四月十七日は、東照大権現すなわち家康が、駿府城で亡くなった日です)。東照宮は日光東照宮を分祠したもので、荒戸山、現在の西公園にありました。その跡は今、光雲神社になっています。正月の松囃子、二月の太宰府天満宮と同様、禁止のぜいたく品を用いないよう、村人に徹底することが求められました。

久我記念美術館 3月企画展 5日(土)~27日(日)

(月曜休館・祝日の場合は翌日休館・入場無料)

中尾 勝次・印藤 京子 日本画展

3月の久我記念美術館は、5日から27日まで「中尾 勝次・印藤 京子 日本画展」を開催します。

日本画とは「明治以後にヨーロッパから入った西洋画に対し、我が国在来の技法・様式による絵画。墨や岩絵具を主として、若干の有機色料を併せ用い、絹・紙などの上に毛筆で描く」(広辞苑)とあります。

お二人とも城山区にお住まいで、作品は同区主催の“城山区文化祭”で一部発表。同区の小山田英生区長の奨励と推挙もあり、一念発起、今回の個展となったものです。

作品は、風景画や静物画など約22点。丹精こめた作品群は、見る人に鮮烈な印象を与えます。



▲中尾さん作品

●中尾さんのメッセージ

私は旅行に出ると必ず地元の人たちに「あなたが一番素晴らしいと思う風景は？」と聞いてみる。



教えられたその場に立つてみると、人それぞれ見る目、思いが違ふように、なかなか絵心をそそる風景に出会う機会は少ない。

今回、印藤さんとの二人展において、一人でも多くの方々と自然美の一瞬の輝きを分かち合えればと思っております。

●印藤さんのメッセージ

私にとって日本画を描くことは、日々の生活の中にある楽しみであり、小路に咲いている可愛らしい花を見つけては、描き留めたりしています。



私たちの周りには自然。旅先で見つけた雄大な自然。作品から様々な自然を楽しんでいただけたらと思います。



▲印藤さん作品

2月の企画展
木村 辰也 版画展
5日(土)から27日(日)まで(月曜休館・入場無料)